

# 児童虐待の意思決定に関する海外の研究動向—— 実践の質の向上に向けた示唆

池田 紀子\*

## 抄録

本研究は、日本での児童虐待に対応する実践の質の向上に向けた示唆を得るために海外の研究動向を概観した。SocINDEX with Full Text を用いて、「child abuse and neglect」「child maltreatment」「social work」「decision making」のキーワードで検索された1978～2015年までの98件の論文の内、米国、英国、オーストラリア、カナダを対象とし、当事者研究や巻頭言を除いた44本の文献レビューを行った。調査結果からは、①意思決定の影響要因、②リスクアセスメント指標、③リスクアセスメントモデル活用の課題、④ソーシャルワーカーの個別性、⑤組織的要因の5つのフレームワークが分類された。合理的意思決定の重要性を踏まえつつ自然主義的意思決定アプローチの意義が提示された。結論として①ソーシャルワーカーとしての専門性向上と課題に応じた意思決定の選択が求められる、②支援開始レベル thresholds が存在する中でソーシャルワーカー自らが実践で考えながらの意思決定が必要との示唆が得られた。

**Keywords** : 児童虐待, マルトリートメント, 意思決定, リスクアセスメント, 支援開始レベル

## I. 研究の背景と目的

2000年の「児童虐待の防止等に関する法律（平成十二年五月二十四日法律第八十二号）」（以下、児童虐待防止法と略）制定以降、様々な虐待防止対策が講じられているが、児童虐待の相談件数は増加し続けている。芝野（2001：11）によると、

児童虐待防止法は「子どもの命を護る」ことを最優先とし、「子どもの命を救えなかった」結果を非常に嫌うリスク回避的な法律であるが、関係機関が関与しながらの虐待死は発生し続けている。厚生労働省社会保障審議会児童部会専門委員会による報告書では、虐待通告が児童相談所と市区町村の双方が受理する体制であることから、通告する側に緊急度の判断と通告先の選択が強いられており、初期対応の漏れを防ぐため児童相談所と市区町村の間で共通のアセスメント基準を作成することが提言されている（厚生労働省2016）。

\* Ikeda, Noriko

ルーテル学院大学大学院総合人間学研究科社会福祉学専攻博士後期課程

虐待アセスメントでは、情報が入った時点の状態で子どもの安全が確保されているのか、家庭内で発生している現象が虐待に該当するのか、行政機関への通告が必要なのか、虐待と認定した上で早急な家族分離が必要なのか、家族再統合にあたって虐待の再発の可能性があるのかなど、複雑で不確実な状況の中で意思決定が迫られる。アセスメントの精度を上げていくためには、支援者が行う意思決定が専門性に基づいてなされていることが前提と考える。

芝野 (1990:8) は、Stein & Rzepnick (=1988) が行ったソーシャルワーカーの意思決定行動の分析から、「インテークで行う決断を理性的かつ合理的な意思決定行為としてとらえ、手本とすべき意思決定モデルを持つ必要がある」こと、また、ソーシャルワーカーの自由裁量が不可欠だが、その裁量権は個人の認知特性や価値観、感情などの影響を受けることへの注意が必要と指摘している。

児童虐待に対応するソーシャルワーカーの国内の意思決定研究では、エキスパートの意思決定の特徴や認知構造、意思決定ルールを明らかにすることで、経験年数が少ない支援者による意思決定や専門職を対象とした研修への貢献が目指されている (原 2006; 畠山 2015)。実践ツールとして導入されているリスクアセスメントに関する先行研究では、米国のアセスメント指標の紹介と日本における指標開発の検討 (加藤曜子 1994)、オーストラリアのリスクアセスメントモデルの特徴と示唆 (加藤純 2001)、関係機関による共通のアセスメント指標開発 (加藤・九鬼・笠原 2004)、リスクの見方の標準化とネグレクト事例におけるリスクの早期発見 (加藤曜子 2004)、英国のコモンアセスメントを参照にした児童相談の共通指標の検証 (加藤曜子 2006)、要保護児童対策地域協議会のための共通アセスメント指標 (加藤曜子 2009)、市町村単位の自治体での在宅支援モニタリングツールの実践評価 (畠山 2005) があげられる。

上記の先行研究では海外の文献も紹介されているが、これら以外にもこれまで様々な海外文献が

日本に紹介されてきた。一方、海外からの文献紹介は、各研究者の関心に依拠して断片的に紹介されてきた側面もあるため、本研究では特定の立場や関心に依拠するのではなく総合的に海外における児童虐待の意思決定に関する研究動向を把握することを目的とし、実践の質の向上に向けた示唆を整理することにした。

## II. 研究方法

SocINDEX with Full Text を用いて、検索語として「child abuse and neglect」and「child maltreatment」and「social work」and「decision making」を含む査読付き学術専門誌を期間の設定をしないうで検索したところ、1978年から2016年までの期間で99件の論文が該当した。なお or 検索を実施すると約15万件の絞り込み結果となったため、今回は検索語が重複した論文のみを対象とした。調査期間を2015年までに設定することとし、2016年の論文を除外した98件の論文名とアブストラクトを翻訳し、研究目的、調査対象国、調査対象者、意思決定場面の一覧表を作成した。調査対象国は重複を含めて11か国、100件の調査が実施された。調査件数の国別内訳は、米国40件、英国21件、カナダ16件、オーストラリア11件、オランダ4件、イスラエル3件、アイルランド1件、キプロス1件、スロヴェニア1件、ノルウェー1件、ルーマニア1件であった。

本研究では、国内の先行研究で引用されることが多い米国、英国、カナダ、オーストラリアの4か国を取り上げることとした。また、ソーシャルワーカー自身や所属する組織としての決定を焦点化するために、子どもや家族などの当事者やソーシャルワーカー以外の支援者を対象とした調査は除外することにした。除外論文は、当事者研究25論文、調査対象がソーシャルワーカー以外の支援者5論文、意思決定と関連がない8論文、巻頭言3論文、調査対象国以外13論文であった。残った44論文の意思決定場面を確認すると、全ての論文において、虐待対応での重要な意思決定場面 (通告、送致、リスク評価、虐待の確証、保

護、家族分離・再統合、サービス提供の決定)が含まれていたため、この44論文を文献レビューの対象にすることにした。

次に44論文の本文を読み込み、Garrard (=2012)のマトリックス方式を参照しながら上述の一覧表に調査目的、調査方法、調査結果、考察の要約内容を日本語で追記した。調査方法の内訳は、量的調査(質問紙、行政統計調査の二次分析)11論文、質的調査(個人・グループインタビュー、ケース記録・事例分析)10論文、ビネット調査9論文、ミックス法(質問紙、インタビュー、エスノグラフィ)3論文、文献レビュー11論文であった。データの分析にあたっては、量的調査、質的調査、ビネット調査、ミックス法の33論文の調査結果の要約内容をフレームワークごとに整理した。文献レビューの11論文は、論文全体を通して筆者が重要と考えたトピックの要約内容をまとめた。

### Ⅲ. 研究結果

#### 1. 児童虐待の意思決定に関する調査結果について

表1では、調査結果の要約内容を【①意思決定の影響要因】【②リスクアセスメント指標】【③リスクアセスメントモデル活用の課題】【④ソーシャルワーカーの個別性】【⑤組織的要因】の5つのフレームワークで整理した。次に、以下の通り<>のトピックごとの項目を「 」内にまとめた。

【①意思決定の影響要因】では、<虐待現象>として「深刻度」「パターン」、<子どもの状況>として「身体への暴力」「怪我」「年齢」、<家族>として「家族の特徴」「ドメスティック・バイオレンス(以下、DVと略)の有無」「養育者の行動」「養育スキル」「養育改善に向けた動機付け」「薬物依存の有無」、<支援機関との関わり>として「機関間連携」「サービス受給の有無」「過去の通告の有無」「家庭外措置の期間」、<生活環境>として「都市と地方の居住場所の違い」「貧困」「居住環境」、<ソーシャルワーカーの要因>として「専門職としての経験」、<意思決定の根拠>とし

て「虐待の証拠」「信頼できるエビデンス」「危害の有無」が抽出された。<意思決定プロセス>にどのような要因が関連しているか、どの要因が重要であるかの「専門職間のコンセンサス」が一致しておらず、家庭復帰ケースの<意思決定プロセス>では「復帰の時期」「根拠」「決定する部門」「当事者の要望」を踏まえるかが不一致との指摘もあった。

【②リスクアセスメント指標】では、<子どもの状況>として、「身体的虐待の有無」「年齢」「学習状況と対処能力」、<リスクの程度>として、「虐待の深刻度」「過去の虐待歴」「生命の危険」「危害の特異性」「将来発生する危害のリスク」、<家族>として「親による行為が意図的か、反社会的か」「子どもとの関係性」「親が自らの行動を改める意欲があるか」「養育者の責任能力や機能」「家庭の状況」「親の特性」「経済状態への対処能力」「社会システムへの対応」「男性による虐待」「親による協働の程度」「親の薬物・アルコール依存」、<生活環境>として「不衛生さ」、<死亡原因>として「落下」「食べ物の詰まらせ」「窒息」「溺死」「火事」「交通事故」が抽出された。<優先順位の測り方>として、「ネグレクト」は「身体的虐待」「性的虐待」と比べリスクが低い、「グレーゾーン」であるかどうか、「高度/中度/低度」の「リスク」、 「肯定的/曖昧/否定的/強い否定」の「養育能力」、 「高度/中度/低度/証拠無」の「深刻度」が提示された。

【③リスクアセスメントモデル活用の課題】は、<ソーシャルワーカーの課題>として「初心者の適応」が困難であったり、モデルよりも「過去の経験」「価値観」に依拠し「主観的な解釈」による意思決定がなされていることが示された。「確信」がない状況だとリスクを高いものとして「過剰評価」する「間違い」をおかす傾向や「スコアに応じた支援」にとどまり、リスクに関連する「多様性」「不確実性」「不慮の出来事」を把握できず「ニーズ」を見逃すこともある。<モデルの検証>については、ツールとして「意思決定モデル」「安全アセスメント」「リスクアセスメント」が開

表1 児童虐待の意思決定に関する調査結果について

調査方法	調査結果の要約内容 (N=33)	フレームワーク
ビネット調査	意思決定プロセスの関連要因について専門職間でコンセンサスを得ることが困難だけでなく、どの要因が重要であるかの見解が不一致 (Craft 1985)。	①意思決定の影響要因 (1985-2015)
量的調査	都市と地方の居住場所の違い (Craft & Staudt 1991)。	
ビネット調査	虐待が深刻になればなる程、通告の意思決定がなされていた。通告ケースには、身体への暴力や差し迫った怪我、子どもの低年齢の特徴がある (Ashton 1999)。	
ビネット調査	家族の特徴、子どもの年齢、虐待の深刻度・パターン、貧困、支援サービス受給の有無、専門職としての経験や機関間連携等 (Britner & Mossler 2002)。	
量的調査	DVは、児童虐待と重複した問題 (Postmus & Ortega 2005)。	
量的調査	リスクだけでなく、DV被害者が子どもを守ることに失敗していないかという基準など、養育者の行動から虐待現象であるか、あるいは養育者なりの合理的で慎重な行動であるかを判断 (Coohey 2007)。	
ミックス法	虐待の認定が覆った要因は、①証拠があるという基本的なスタンダードに合致しないという失敗、②信頼できるエビデンスが不十分、③信頼できる論拠が不十分、④危害または危害のリスクの証拠がないという要因 (Fakunmoju 2009)。	
ビネット調査	標準以下の居住環境・DV・薬物依存の有無を考慮 (Stokes & Schmidt 2011)。	
量的調査	虐待状況、親の養育スキル、養育改善に向けた親の動機付け、安全アセスメント、家庭外措置の期間、通告の有無との関連 (Wells & Correia 2012)。	
質的調査	家庭復帰ケースで、いつ子どもが家に戻れるのか、また何に基づいて戻れるのかについて、どの部門が決定するのか、子どもや親の希望や要望を踏まえた結果にするのが明確にされておらず、意思決定プロセスの一致が見られない (Murphy & Fairtlough 2015)。	
ミックス法	①最初の決定：身体的虐待の有無、子どもの年齢、ネグレクトの程度。②2番目の決定：リスクの程度。グレーゾーンであるため、親のネグレクトは意図的か、子どもとの関係が乏しいか、親の行動は反社会的であるか、親は自らの行動を改める意欲があるかという抽象的な要因の熟考が求められる。(Alter 1985)	②リスクアセスメント指標 (1985-2014)
量的調査	リスクアセスメントの優先順位は、①年齢 (更なる危害から自らを守ることができる機能や能力があるか)、②養育者の能力・機能、③虐待の深刻度や過去の虐待歴 (Meddin 1985)。	
量的調査	リスクアセスメント指標は、家庭の状況、親の特性、経済状態への対処能力、社会システムへの対応、不衛生さ、子どもの学習状況と対処能力、親の薬物・アルコール依存からなる (Fanshel, Finch & Grundy 1994)。	
量的調査	死亡原因は落下、食べ物の詰まらせ、窒息、溺死、火事、車の事故等。生命の危険のある深刻な身体的虐待はリスクが高い。男性による虐待の場合、死亡や深刻な障害が多い (Freeman, Levine & Doueck 1996)。	
質的調査	リスクのレベル、虐待のタイプ、養育者の態度、養育能力、過去の虐待歴、虐待の深刻度等。リスクを高度/中度/低度、養育能力を肯定的/曖昧/否定的/強い否定、深刻度を高度/中度/低度/証拠無と測る (Little & Rixon 1998)。	
質的調査	初期アセスメントでの送致は、危害の特異性、深刻度、将来発生する危害のリスク、親の責任能力、協働の程度等の要因で決定されている (Platt 2006)。	
ビネット調査	ネグレクトの場合、身体的・性的虐待と比べてリスクが低く見積もられる (Stokes & Taylor 2014)。	
ビネット調査	初心者は、リスクアセスメントの概念について気付きを得ても表面的な理解であり、実践に適応していくことが困難 (Drury-Hudson 1999)。	③リスクアセスメント活用の課題 (1999-2012)
ビネット調査	リスク要因の危険度のレベルは、同じツールを用いても様々な結果が出る。設問が漠然とし、リスク要因間の相互作用が考えられていない。ツールを使った意思決定の一致度は弱く、合致した場合でもリスク要因による危険度のレベルは多様。ソーシャルワーカーは意思決定の根拠を過去の経験や価値観に依拠し、標準的な優先順位や合理的なモデルではなく、主観的な解釈に基づいて意思決定 (Kang & Poertner 2006)。	
質的調査	意思決定モデル、安全アセスメント、リスクアセスメントが国内の関係機関で使用されている比率は50%以下であり、信頼性や妥当性の検証は不十分 (DeRoma et al. 2006)。	
量的調査	リスクアセスメントの結果は個人により異なり、普及に限界。再発リスクをみると、当初高リスクと評価したケースの再通告率28%に対し、低リスクと評価したケースは再通告率83%と一致しなかった結果から、確信がない状況だとリスクを高いものとして過剰評価する間違いをおかす傾向がある (Dorsey et al. 2008)。	
質的調査	意思決定ツールが使われない理由は、①リスクの過大評価、②単純化され、実践が限定される。ツールは意思決定を助けたり、一致して促進したり、最もサービスを必要とする子どもを支援対象としてとらえるために使われていない。ツールを用いていこうとする意図と日々の現場で起こる事象との間に断絶がある (Gillingham & Humphreys 2010)。	
質的調査	職場でコンピューター技術を使うことで、情報の質への懸念や時間の制約が生じたり、スコアに応じた支援にとどまり、リスクに関連する行動の多様性や不確実性、不慮の出来事を把握できず、ニーズを見逃す (Pithouse et al. 2012)。	

量的調査	意思決定パターンにおいて、価値観や政策と子どもを保護したいという思いの間に葛藤が生じている (Howell 2008)。	④ ソーシャルワーカーの個別性 (2008-2014)
質的調査	高い確信をもつソーシャルワーカーは、リスクが高かろうと低かろうと、虐待の深刻度を測りながら、他機関との協働、親の感情察知を行っていた (Regehr et al. 2010)。	
ビネット調査	リスクレベルやサービス提供の決定では行政上の知識やエビデンスという客観的要因を用いるが、家庭訪問やクライアントと関わる時間の決定は、クライアントとの関係構築を考慮して主観的な要因に基づいて意思決定 (Stokes & Schmidt 2012)。	
質的調査	保護決定の年齢要因として、思春期の子どものニーズに保護システムが合致しない場合は、ソーシャルワーカーは別の選択肢を模索することが示された (Gorin & Jobe 2013)。	
量的調査	死亡ケース調査によると、経験年数が長く、高い教育を受けたソーシャルワーカーが死亡事故を経験しており、事故前は自らの決定に確信を持っていた (Douglas 2013)。	
ミックス法	ソーシャルワーカーの認知では、過去の対応に基づく経験的・直観的意思決定と同時に、指標に基づく分析的な意思決定も行われていた (Hackett & Taylor 2014)。	⑤ 組織的要因 (2007-2013)
量的調査	通告の意思決定における組織的要因には、明確な業務命令、通告しなかった場合の否定的な制裁、クライアントに関する決定にソーシャルワーカーが関与する度合があり、通告を強化しているのは明確な業務命令 (Ashton, 2007)。	
質的調査	職場で求められるタイムリーなアセスメントという目標達成、過重労働、人手不足、全てのリスクを予見し対処できるべきと見なされる非現実的な期待など組織的な要因が、アセスメントの質に否定的な影響を与えている (Horwath 2011)。	
ビネット調査	通告のスクリーニングのアセスメントの実施状況は、個人と職場によって異なる (Johnson et al. 2012)。	
質的調査	コンピューター技術によるデータベースは、子どもと親の状況に関する複雑さと多様性が構造化されていない (Gillingham 2013)。	

表2 児童虐待の意思決定に関する文献レビュー論文の要約内容について

文献レビュー論文の要約内容 (n=11)
リスクアセスメントモデルには、分離による安全確保のためのアセスメントと、早期介入を含めた将来虐待が発生する可能性のアセスメントがある。緊急性の高い深刻な再発のみを防止するのか、あらゆる虐待を防止するのかの課題がある (DePanfilis & Scannapieco 1994)。
家族維持と子ども保護を同時に行うことは困難で、どちらかの選択の決定が必要 (Gelles 2000)。
リスクアセスメントモデルには、実践の経験や経験上のエビデンスによるコンセンサスに基づくものと、実際に使ってみた結果の積み上げによるツールとして使われるものがある (Carnochan, Rizik-Baer & Austin 2013)。
システムティックな情報収集であるが、リスクアセスメントモデルは、その能力が発揮できるように研修を受けた人材に取って代わるものではない (Doueck et al. 1993)。
チェックリストで情報収集能力が向上したとしても、理論と実践に基づく基盤がなければ、情報に意味を持たせた決定に確信を持たず方向性を失う (Howe, Dooley & Hinings 2000)。
リスクアセスメントでは様々な要因が複雑な相互作用を起こすので、観察スキルのみならず、観察したことを理解し業務とすなすべきシステムにつなげていく知識が必要 (Akister 2011)。
リスクマネジメントの導入で防衛的な実践となっている (Lees, Meyer & Rafferty 2013)。
最近のシステムは、子どもの生活の文脈により虐待事件に焦点をあてており、日常的なネグレクトを経験している多くの子どもたちを保護できないというネグレクト特有の意思決定の困難がある (Jones & Gupta 1998)。
家庭外分離の決定では問題が複雑なため個別のニーズへの対応が必要であり、ソーシャルワーカーはその場での状況に応じた、一貫性の説明できない決定を行っている (Bhatti-Sinclair & Sutcliffe 2013)。
支援開始レベル thresholds という言葉は、子どもに対する懸念がサービス提供のトリガーとなるのに十分だと考えられるレベルを示すのに使われている。この支援開始レベル thresholds は、困難を抱えた家族から死につながりかねない虐待にある窮状まで様々な文脈で語られている。意思決定から起きるエラーを最小限にすることが認知上のバイアスを減少させるという合理的な意思決定の重要性を踏まえつつ、1980年代後半から現れてきた自然主義的意思決定アプローチ Naturalistic Decision Making approach (NDM) の意義を再認識していく必要がある。NDMは、直観を価値があるものと位置づけ、理性と直観のバランスが実践に重要としている。支援開始レベル thresholds の概念を現場で応用するために NDM の理論上の立場を用いる (Platt & Turney 2014)。
支援開始レベル thresholds は、全ての関係者(親、子ども、ケースワーカー、子ども保護部局の職員、関係機関)の特徴、志向、価値に影響を与え、また影響を受ける (Shlonsky 2015)。

発されているが、「信頼性や妥当性の検証」は不十分である。また、同じツールを用いても「リスク要因」の「危険度のレベル」は様々な結果であり、「ツールを使った意思決定」の一致度は弱い。

意思決定ツールが使われない理由としては、「リスクの過大評価」「単純化」「実践の限定化」があげられた。

【④ソーシャルワーカーの個別性】としては、

子どもを保護したいという「思い」をもつソーシャルワーカーが「価値観」「政策」との間に「葛藤」を抱える場合がある一方、保護システムがニーズと合致しない場合「別の選択肢」を「模索」する場合もあることが示された。「確信」としては、高い確信がある場合は、リスクが高かろうと低かろうと、虐待の「深刻度」を測りながら、「他機関との協働」「親の感情察知」が遂行されていた。一方、死亡事故を経験したソーシャルワーカーは、「経験年数」が長く、高い「教育」を受けていたほか、事故前は自らの決定に「確信」を持っていた。また、「意思決定方法の使い分け」では「客観的要因」としてリスク評価やサービス提供の決定をしつつ、家庭訪問やクライアントと関わる時間は「主観的要因」で決定するなど、指標に基づく「分析的意思決定」を行いながら、同時に過去の対応に基づく「経験的・直観的意思決定」も行っていた。

【⑤組織的要因】では、「通告の意思決定」は、「個人」と「職場」によって差異が生じていたり、「明確な業務命令」「否定的な制裁」「クライアントに関する決定にソーシャルワーカーが関与する度合」が影響を及ぼしていた。「職場環境」としては、否定的な影響を及ぼす要因として「目標達成」「過重労働」「人手不足」、全てのリスクを予見し対処できるべきと見なされる「非現実的な期待」が抽出されたほか、職場で進むデータベース化には子どもと親の状況に関する「複雑さ」と「多様性」が構造化されていないとの指摘があった。

## 2. 児童虐待の意思決定に関する文献レビュー論文の要約内容について

表2に示した文献レビュー論文の要約内容の概要は、以下の二点としてまとめられた。

### (1) リスクアセスメントモデルによる意思決定

リスクアセスメントモデルの目的は、家族分離の決定と虐待発生の予測に大別されるが、子ども保護と家族維持を同時に行うことは困難であり、目的に応じたモデルの選択が求められる。モデル自体は、エビデンスに基づくものと、実践ツール

として用いられる中で積み上げられたものがあるが、モデルを使うことで能力を発揮できる人材育成が前提である。その能力は理論と実践が基盤とされるものであり、ソーシャルワーカーはチェックリスト形式のモデルで情報を集めるだけでなく、主体的に意味を持たせる決定が求められている。また、観察した内容をモデルに落とし込むだけでなく、実際の業務に活かしていくための知識が必要である。一方、リスクアセスメントモデル導入によって、実践が防衛的となったり、生命の危険性のある虐待事件に焦点があてられてしまい、日常的にネグレクト状態にある子どもたちの保護につながらないという側面もある。ソーシャルワーカーは個別性の高い複雑なニーズへの対応が迫られるなかで、その場の状況に応じた決定を行っている。

### (2) 支援開始レベル thresholds と意思決定理論

Thresholdsという言葉が、日常的なネグレクトから生命の危険性までの広範囲にわたるサービス提供のトリガーとなるのに十分なレベルを示すものとして使われている。この thresholds という言葉は、敷居や入り口、出発点、境界、閾値等と訳されるが、本研究では『オクスフォード英語辞典』の「the level at which one starts to feel or react to something (何かを感じたり反応し始めたりするレベル)」(Stevenson, Angus et al. eds. 2010: 1853) の定義に依拠し、「支援開始レベル」と訳出した。

支援開始レベル thresholds の決定は、子どもや親を含めたすべての関係者やその所属する組織の特徴、志向、価値に対して相互に影響を及ぼすものである。支援開始レベル thresholds の概念を現場で応用するためには、1980年代後半から現れてきた自然主義的意思決定アプローチ Naturalistic Decision Making approach (NDM) の意義を再認識していく必要がある。NDMは、直観を価値があるものと位置づけ、理性と直観のバランスが実践に重要とするものであるが、同時に、意思決定から起きるエラーを最小限にすることが認知上のバイアスを減少させるという合理的意思決定の

重要性を無視するものではない。

### 3. 児童虐待の意思決定に関する調査結果についての時系列の変遷

カテゴリーにまとめられた論文の出版年を時系列でまとめると、図1の結果となった。意思決定

の影響要因やリスクアセスメント指標については継続して研究が行われている。2000年前後からリスクアセスメント活用の課題が提示されるようになり、近年の研究では様々なモデルやツールを用いるソーシャルワーカーの個性や、虐待対応を行う組織的な要因に焦点が当てられている。

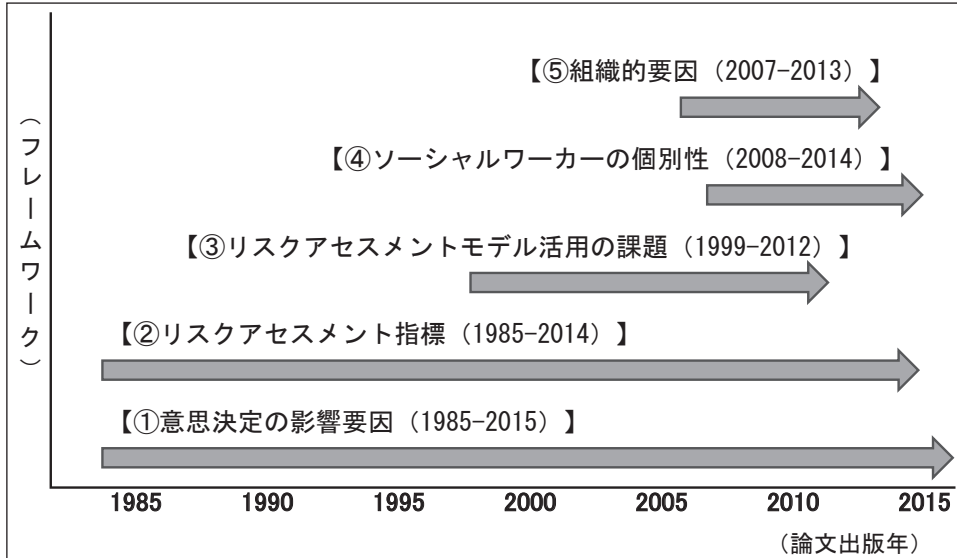


図1 児童虐待の意思決定に関する調査結果についての時系列の変遷

## IV. 考察と課題

### 1. 児童虐待対応を担う支援者に求められる専門性と課題に応じた意思決定

本研究の調査対象の大半が、子ども保護の権限を有している行政機関に所属する自治体ソーシャルワーカーであり、日本における配置人数や専門職性との違いが大きく、海外の動向をそのまま応用することは困難である。しかし、Alter (1985) による「ソーシャルワーカーは法律に正常と逸脱行為の具体的な境界線が引かれていない中で法律と社会規範の間での対応を重ねていくため、外部からはソーシャルワーカーがどのように意思決定を行い、それぞれやっていることがなぜ一致していないのかを理解することが難しい」との指摘は、児童虐待防止法制定後の日本の状況にもあてはまると考えられる。虐待対応は完全な答えがない中で意思決定が求められる現場であり、支援者が「マイクロレベルの確信とマクロレベルの不確実

性が同時に生起している難しい状況」(Regehr et al. 2010) に置かれる現状や、「ツール普及による広範囲な改革よりも、現場の複雑さに対処できる能力を高めていくことが最優先課題」(Gillingham & Humphreys 2010) との専門性向上の必要性は国内外で共通する課題と捉えることができる。人材育成や研修の必要性は複数の論文で指摘されていたが、ツールを使いこなす能力に加え、「効果的に家族と協働できるスキル」(Ashton 1999) や、「ある程度の自由裁量に基づく主張」(Pithouse et al. 2012) など、国内における実践力として求められていると考える。

リスクアセスメントの限界が提示された論文の中で分析ツールが成功していないと指摘した Hackett & Taylor (2014) は、「環境や個人要因が複雑で多様な実践では、課題に応じた意思決定方法の選択が必要」と述べている。畠山 (2015: 66-73) が、日本ではリスクアセスメントが主流

であるが、安全アセスメントと区別したり、家族のニーズやストレングスへの認識を深めるなどの支援につなげていくことが必要と指摘しているように、国内においても課題や目的に応じた意思決定方法の選択という視点が更に焦点化されるべきだと考える。

## 2. ソーシャルワーカー自らが考えながらの意思決定

筆者は、スクールソーシャルワーカーとして実践に携わっているが、予防が期待される早期段階での虐待対応において、虐待と決定する内容や意味について支援者間で共通理解を深めていく必要性を感じている。例えば、ネグレクトケースでは通告されたとしても当事者が困っておらず生命の危険性もないとして、地域での「見守り」が長期間経過していく状況が見受けられるが、Stokes & Taylor (2014) が「ネグレクトを低いリスクのレベルと見なすのではなく、許容できないネグレクトであると判断するための検証が必要。どのように介入しないリスクと正当性を欠く介入のリスクのバランスをとりながら、子ども保護のニーズを決定するか」と述べているように、ネグレクトか身体的虐待かという虐待類型で支援の意思決定を行った結果、支援の不作為となりかねないリスクも生じる。

ネグレクトについて、Fakunmoju (2009) は「証拠に基づいた支援開始レベル thresholds に合致しないケースだと虐待ではないとして判断が覆る傾向がある」と指摘しつつ、「虐待非該当となったケースは、危害または危害のリスク評価がそのままにされており、調査スキルが貧弱であることや証拠が不十分」であり、「虐待を立証するプロセスは複雑であり、証拠を見つけるには臨床上のスキルが伴う」と述べている。また、英国の先行研究では、共通アセスメントフレームワークによる送致の際に子ども保護のための支援開始レベル thresholds に混乱があるとの指摘 (Gorin & Jobe 2013) や、1989 年児童法 17 条のニーズをもつ子どもとしての初期アセスメントをとるか同法 47

条で緊急保護に向けた虐待対応の手続きをとるかという支援開始レベル thresholds の決定がなされる (Platt 2006) など、thresholds を焦点化した論点があがっていた。

こうした支援開始レベル thresholds の概念は、日本での虐待通告をめぐる関係機関の葛藤を想起させる。早期段階で、いかに介入権限を有している組織へつなげていくかを決定するかは、通告義務を有する側の「臨床上のスキル」と同時に、自ら考えながら実践現場で意思決定を行うというソーシャルワーカーの主体性が求められていると考える。なお、現時点では、thresholds に関する文献調査は断片的なものであり、「支援開始レベル」以外の訳語の可能性も含め、更なる概念整理が必要である。また本研究においてアセスメントと意思決定の関連や区別について明確な定義を提示できていない点についても、今後の課題として取り組みたい。

## 引用文献

- Akister, Jane (2011) Protecting Children: The Central Role of Knowledge, *Practice*, 23(5), 311-323.
- Alter, Catherine Foster (1985) Decision-Making Factors in Cases of Child Neglect, *Child Welfare*, 54(2), 99-111.
- Ashton, Vicki (1999) Worker Judgements of Seriousness about and Reporting of Suspected Child Maltreatment, *Child Abuse & Neglect*, 23(6), 539-548.
- Ashton, Vicki (2007) The Impact of Organizational Environment on the Likelihood that Social Workers Will Report Child Maltreatment, *Journal of Aggression, Maltreatment & Trauma*, 15(1), 1-18.
- Bhatti-Sinclair, K., Sutcliffe, C. (2013) Challenges in Identifying Factors Which Determine the Placement of Children in Care? *An International Review. Child & Adolescent Social Work Journal*, 30(4), 345-363.
- Britner, Preston A., Mossler, D.G. (2002) Professionals' decision-making about out-of-home placements following instances of child abuse, *Child Abuse & Neglect*, 26(4), 317.
- Carnochan, Sarah., Rizik-Baer, D., Austin, M. J. (2013) Preventing the Recurrence of Maltreatment,



- Journal of Evidence-Based Social Work*, 10(3), 161-178.
- Coohy, Carol (2007) What Criteria Do Child Protective Services Investigators Use to Substantiate Exposure to Domestic Violence? *Child Welfare*, 86(4), 93-122.
- Craft, J. L. & Staudt, M. M. (1991) Reporting and Founding of Child Neglect in Urban and Rural Communities, *Child Welfare*, 70(3), 359-370.
- Craft, John L. (1985) Case Disposition Recommendations of Attorneys and Social Workers in Child Abuse Investigations, *Child Abuse & Neglect*, 9(2), 165-174.
- DePanfilis, Diane., Scannapieco, M. (1994) Assessing the Safety of Children at Risk of Maltreatment: Decision-Making Models, *Child Welfare*, 73(3), 229-245.
- DeRoma, Virginia., Kessler, M., McDaniel, R., et al. (2006) Important Risk Factors in Home-Removal Decisions: Social Caseworker Perceptions, *Child & Adolescent Social Work Journal*, 23(3), 263-277.
- Dorsey, Shannon., Mustillo, S.A., Farmer, E. M.Z., et al. (2008) Caseworker assessments of risk for recurrent maltreatment: Association with case-specific risk factors and re-reports, *Child Abuse & Neglect*, 32(3), 377-391.
- Doueck, Howard J., English, D. J., Depanfilis, D. et al. (1993) Decision-Making in Child Protective Services: A Comparison of Selected Risk-Assessment Systems, *Child Welfare*, 72(5), 441-452.
- Douglas, Emily M. (2013) Child Welfare Workers Who Experience the Death of a Child Client, Douglas, Emily M., *Administration in Social Work*, 37(1), 59-72.
- Drury-Hudson, Julie (1999) Decision making in Child Protection: The Use of Theoretical, Empirical and Procedural Knowledge by Novices and Experts and Implications for Fieldwork Placement, *British Journal of Social Work*, 29(1), 147-169.
- Fakunmoju, Sunday Bolanle (2009) Substantiation and Adverse Appeal Outcomes: Content Analysis and Testing of Drake's Harm/Evidence Model, *Child Maltreatment*, 14(1), 53-68.
- Fanshel, David; Finch, S. J., Grundy, J. F. (1994) Testing the Measurement Properties of Risk Assessment Instruments in Child Protective Services, *Child Abuse & Neglect*, 18(12), 1073-1084.
- Freeman, Jennifer B., Levine, M., Doueck, H. J. (1996) Child Age and Caseworker Attention in Child Protective Services Investigations, *Child Abuse & Neglect*, 20(10), 907-920.
- Garrard, Judith (2011) *Health Sciences Literature Review Made Easy: The Matrix Method*, Jones & Bartlett Learning LLC. (= 2012, 安部陽子訳『看護研究のための文献レビュー——マトリックス方式』医学書院.)
- Gelles, Richard J. (2000) Controversies in Family Preservation Programs, *Journal of Aggression, Maltreatment & Trauma*, 3(1), 239-252.
- Gillingham, Philip (2013) The Development of Electronic Information Systems for the Future: Practitioners, 'Embodied Structures' and 'Technologies-in-Practice', *British Journal of Social Work*, 43(3), 430-445.
- Gillingham, Philip., Humphreys, C. (2010) Child Protection Practitioners and Decision-Making Tools: Observations and Reflections from the Front Line, *British Journal of Social Work*, 40(8), 2598-2616.
- Gorin, Sarah., Jobe, A. (2013) Young People Who Have Been Maltreated: Different Needs—Different Responses? *British Journal of Social Work*, 43(7), 1330-1346.
- Hackett, Simon., Taylor, A. (2014) Decision Making in Social Work with Children and Families: The Use of Experiential and Analytical Cognitive Processes, *British Journal of Social Work*, 44(8), 2182-2199.
- 原佳央理 (2006) 「子ども虐待ケースの援助に携わる専門家の意思決定の特徴——児童相談所の熟練した専門家のIF-THEN ルールの分析を通して」『関西学院大学社会学部紀要』101, 127-136.
- 畠山由佳子 (2005) 「宝塚市児童虐待防止ネットワーク会議における在宅支援モニタリングツールの実践評価」『子どもの虐待とネグレクト』7(1), 86-95.
- 畠山由佳子 (2015) 「『家族維持』を目的とした子ども虐待ケース在宅支援初期対応における意思決定要因抽出のためのエキスパートインタビュー調査」『神戸女子短期大学紀要』60, 33-48.
- 畠山由佳子 (2015) 「日本における児童虐待ケースに対する区分対応システムの開発的研究」平成 25 年度・26 年度学術研究助成基金助成金（基礎研究 C）助成研究成果報告書.
- Horwath, Jan (2011) See the Practitioner, See the Child: The Framework for the Assessment of Children in Need and their Families Ten Years On, *British Journal of Social Work*, 41(6), 1070-1087.
- Howe, David., Dooley, T., Hinings, D. (2000)

- Assessment and decision-making in a case of child neglect and abuse using an attachment perspective, *Child & Family Social Work*, 5(2), 143-155.
- Howell, Michael L. (2008) Decisions with Good Intentions: Substance Use Allegations and Child Protective Services Screening Decisions, *Journal of Public Child Welfare*, 2(3), 293-316.
- Johnson, Kristen., O'Connor, D., Berry, S., et al. (2012) Structuring the Decision to Accept a Child Protection Report, *Journal of Public Child Welfare*, 6(2), 191-205.
- Jones, Jocelyn., Gupta, A. (1998) The Context of Decision-Making in Cases of Child Neglect, *Child Abuse Review*, 7(2), 97-110.
- Kang, Hyun-Ah., Poertner, J. (2006) Inter-rater reliability of the Illinois Structured Decision Support Protocol, *Child Abuse & Neglect*, 30(6), 679-689.
- 加藤純 (2001) 「児童虐待への介入に際するリスクアセスメント・モデル」『ソーシャルワーク研究』26(4), 299-305.
- 加藤曜子(1994)「児童虐待アセスメント指標の諸課題」『社会福祉学』35(1), 59-76.
- 加藤曜子 (2004) 「児童虐待防止法とリスクアセスメントについて」『司法福祉学研究』4, 49-59.
- 加藤曜子・九鬼隆・笠原貴子 (2004) 「児童虐待防止ネットワーク事例検討における在宅アセスメント指標研究」『子どもの虐待とネグレクト』6(1), 43-47.
- 加藤曜子 (2006) 「一般児童相談と虐待相談のモニタリング」『流通科学大学論集 人間・社会・自然編』18(3), 29-37.
- 加藤曜子 (2009) 「要保護児童対策地域協議会 (子どもを守る地域ネットワーク) のための共通アセスメントシートと合同研修の効果」『流通科学大学論集 人間・社会・自然編』21(2), 115-126.
- 厚生労働省 (2016) 「社会保障審議会児童部会新たな子ども家庭福祉のあり方に関する専門委員会報告 (提言)」(<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000116162.html>, 2016/3/15).
- Lees, Amanda., Meyer, E., Rafferty, J. (2013) From Menzies Lyth to Munro: The Problem of Managerialism, *British Journal of Social Work*, 43(3), 542-558.
- Little, James., Rixon, A. (1998) Computer Learning and Risk Assessment in Child Protection, *Child Abuse Review*, 7(3), 165-177.
- Meddin, Barbara J. (1985) The Assessment of Risk in Child Abuse and Neglect Case Investigations, *Child Abuse & Neglect*, 9(1), 57-62.
- Murphy, Eleanor., Fairtlough, A. (2015) The Successful Reunification of Abused and Neglected Looked After Children with Their Families: A Case-File Audit, *British Journal of Social Work*, 45(8), 2261-2280.
- Pithouse, Andrew., Broadhurst, K., Hall, Chris., et al. (2012) Trust, risk and the (mis)management of contingency and discretion through new information technologies in children's services, *Journal of Social Work*, 12(2), 158-178.
- Platt, Dendy (2006) Threshold decisions: how social workers prioritize referrals of child concern, *Child Abuse Review*, 15(1), 4-18.
- Platt, Dendy., Turney, D. (2014) Making Threshold Decisions in Child Protection: A Conceptual Analysis, *British Journal of Social Work*, 44(6), 1472-1490.
- Postmus, Judy L., Ortega, D. (2005) Serving Two Masters: When Domestic Violence and Child Abuse Overlap, *Families in Society*, 86(4), 483-490.
- Regehr, Cheryl., Bogo, Marion., Shlonsky, Aron et al. (2010) Confidence and Professional Judgment in Assessing Children's Risk of Abuse, *Research on Social Work Practice*, 20(6), 621-628.
- 芝野松次郎(1990)「インタークと意思決定」『ソーシャルワーク研究』16(1), 4-11.
- 芝野松次郎編 (2001) 『子ども虐待ケース・マネジメント・マニュアル』有斐閣.
- Shlonsky, Aron (2015) Current status and prospects for improving decision making research in child protection: A commentary, *Child Abuse & Neglect*, 49, 154-162.
- Stein, Theodore J. and Rzepnichi, T. L. (1983) *Decision Making at Child Welfare Intake -A Handbook for Practitioners*, The Child Welfare League of America. (= 1988, 芝野松次郎監訳『児童福祉インターク——意思決定のための実践ハンドブック』ミネルヴァ書房.)
- Stevenson, Angus et al. eds. (2010) *Oxford Dictionary of English*, Oxford University Press.
- Stokes, Jackie., Taylor, J. (2014) Does Type of Harm Matter? A Factorial Survey Examining the Influence of Child Neglect on Child Protection Decision-making, *Child Care in Practice*, 20(4), 383-398.
- Stokes, Jacqueline., Schmidt, G. (2012) Child Protection Decision Making: A Factorial Analysis Using Case Vignettes, *Social Work*, 57(1), 83-90.

- Stokes, Jacqueline., Schmidt, G. (2011) Race, Poverty and Child Protection Decision Making, *British Journal of Social Work*, 41(6), 1105-1121.
- Wells, Melissa., Correia, M. (2012) Reentry into Out-of-Home Care: Implications of Child Welfare Workers' Assessments of Risk and Safety, *Social Work Research*, 36(3), 181-195.

# A Review of International Research on Decision Making in Cases of Child Abuse and Maltreatment: Suggestions to Develop the Quality of Social Work Practice

Noriko Ikeda

This study aims to review the international research on decision making by social workers in cases of child abuse and maltreatment, thereby seeking suggestions that develop the quality of social work practice. Using SocINDEX with Full Text, 98 studies were found from 1978 until 2015 with the keywords “child abuse and neglect,” “child maltreatment,” “social work” and “decision making.” Excluding research of clients’ own decision making and journal prefaces, 44 studies in the United States of America, the United Kingdom, Australia and Canada were reviewed in this study. Research findings are divided into 5 groups: 1) the factors affecting decision making, 2) the risk assessment factors, 3) problems on using risk assessment models, 4) social workers’ individuality, and 5) institutional factors and their 5 analytical frameworks. It was suggested that not only rational decision-making approaches are important, but also that the naturalistic decision-making approaches should be recognized. This resulted in the findings that 1) social workers need to develop their practices as professionals and select decision making models based on the issues, and 2) social workers need to make critically based decisions within existing support level thresholds.

**Keywords:** child abuse and neglect, maltreatment, decision making, risk assessment, thresholds